

WORLD HERITAGE

NEWS

世界遺産ニュースレター

Letter

世界遺産富士山の
後世継承に向けて

特集

富士山の日

◎フェスタ2017 ◎協賛事業

センター建設工事の進捗状況

12月から2月までの工事状況等

研究員コラム

山部赤人の富士山の歌

vol.

33

March, 2017

「描かれた霊峰 Art of Fujisan」授贈式

富士山の世界遺産登録から4回目の「富士山の日」を迎えた平成29年2月23日、日本平ホテル（静岡市）にて、「富士山の日」フェスタ2017が静岡県・山梨県の共催で開催されました。

式典では川勝知事、鈴木県議会議長の挨拶等を引き続き、両県の富士山世界遺産センターでの活用を目的として、認定NPO法人富士山世界遺産国民会議の遠山敦子理事長から両県知事に映像「描かれた霊峰 Art of Fujisan」が寄贈されました。また、静岡交響楽団によるヴァイオリンとハープのウェルカム演奏や、静岡舞台芸術センター（SPA C）による「かがや姫、霊峰に帰る」の上演が行われ、静岡・山梨両県から参加した約300名の来場者を魅了しました。



パネルディスカッション

「富士山と私」富士山を「深く究める」

フェスタの後半は、静岡県の富士山世界遺産センター（仮称）の内山純蔵教授、ハドソン・マーク教授、松島仁准教授、大高康正准教授、田代一葉主任研究員、山梨県立富士山世界遺産センター秋道智彌所長による「富士山と私」富士山を「深く究める」をテーマとしたパネルディスカッションが行われ、静岡・山梨両県の連携についての考えや、本年12月23日の富士山世界遺産センター（仮称）開館に向けた意気込みなどが発表されました。

静岡・山梨両県は、「富士山の日」を機に連携を一層深め、富士山の価値の後世継承に向けた活動を推進するとともに、富士山の名に恥じることはない人づくり、地域づくりを国民運動として展開してまいります。

「富士山の日」

フェスタ2017



富士山

遊びと学びのイベントを開催

2月23日の「富士山の日」を中心に、「富士山の日」フェスタ2017の一環として、浜名湖ガーデンパークと富士山こどもの国において、富士山クイズなど親子で参加できるイベントを開催し、多くの方が参加しました。その他、県内各地で写真展や絵画展の開催、富士山麓でのウォーキングなどの450件以上の「富士山の日」協賛事業が行われました。

「富士山の日」協賛事業



浜名湖ガーデンパークで開催したイベントの様子

富士山 世界遺産センター(仮称) 建設工事の状況

静岡県では、平成29年12月23日の開館を目指して、富士山世界遺産センター(仮称)の整備を進めています。

昨年3月末より建設工事に着手し、2月末現在、全体の進捗率は約45%です。

今後も安全・品質の確保に留意して、着実に施設が完成するよう整備を進めてまいります。



平成28年12月

12月には西棟・北棟の屋上のコンクリート打設工事も終了し、西棟・北棟の構造躯体はほぼ完成しました。

展示棟についてはコア部分の鉄骨が組み終わり、逆円錐形の展示棟を建てるための作業構台及び鉄骨を支える支保工の設置を行いました。

作業構台の完成です。
いよいよ逆円錐形の鉄骨の
組み立てに入ります。



西棟屋上のコンクリート打設前写真



平成29年1月

1月からはいよいよ逆円錐形の展示棟の鉄骨組立を開始しました。西側のブロックから組み立て始め、でき次第時計回りに鉄骨を組み進めていきました。

1月末の時点では逆円錐部の3分の1程度まで鉄骨が組み上がりました。



1月は富士山がよく見え、富士山の形と展示棟の形が同時に確認できる日が多かったです。

組み立て始めた展示棟鉄骨を下から見上げた写真です。



平成29年2月～3月

2月は逆円錐形の展示棟鉄骨の組立を進め、2月中旬には逆円錐形の上部のリング梁が一周繋がりました。

3月上旬までに展示棟内部のスロープや展示室床のコンクリートを打つ準備を進めています。

4月に入りますと展示棟の前面ガラスが設置され、逆円錐部は木格子の取付けが始まります。

内部の螺旋スロープや展示室床のコンクリートを打つ準備をしています。



逆円錐部の展示棟鉄骨が完成しました。



山部赤人の富士山の歌

皆様は、山部赤人の富士山の歌を、次のどちらで覚えていらっしゃるでしょうか？

1 田子の浦ゆうち出でて見ればま白にそ
不尽の高嶺に雪は降りける

2 田子の浦にうち出でて見れば白妙の
富士の高嶺に雪は降りつつ

富士山世界遺産センター（仮称）を整備する課で文学の研究員をしていますとお話すると、どちらの歌が正しいのですかと尋ねられることがあります。以前に行った講座で、受講者の方々にこの質問をしてみましたところ、1と2がちょうど半数ぐらいつつでした。

この歌は、八世紀前半に活躍した歌人・山部赤人が詠んだ歌で、実は、1、2とも同じ歌なのですが、収録されている歌集により歌の形が違っているのです。

1は、八世紀末ごろに成立したとされる『万葉集』の歌で、「天地の 分かれし時ゆ」から始まる長歌と共に収録されています。

2は、十三世紀の初めに編まれた『新古今和歌集』の歌です。藤原定家を選んだとされる『百人一首』にも選ばれていますので、こちらで覚えているかたも多いかと思えます。ちなみに、作者名も『百人一首』では山辺赤人と表記します。

では、なぜ二つの歌の形ができたのでしょうか。『万葉集』では、1の歌は、次のように表記されています。

田児之浦徒 打出而見者 真白衣 不尽能高

嶺尔 雪波零家留

平安時代に仮名が成立する以前は、漢字・漢文を用いて日本独自の言葉を書き記しました。時代を経るに従い、それらは読めなくなり、文法も変わってしまったことから、『万葉集』を理解することは難しくなっていました。それを後世の歌人たちが研究し、解釈したのが2の形なのです。

ただし、1と2では、意味にも違いが出てきます。1の「田子の浦ゆ」の「ゆ」は、後の時代には失われてしまった語なのですが、「くを通して」「く越しに」の意味です。この歌は、薩埵峠から見通しの良い所に出て、目に飛び込んできた、雪を戴く富士の姿に対する感銘を巧まずに詠んだものと解されます。

意味としては、「田子の浦越しに、見晴らしのよい所へ出て見てみると、富士の高嶺には真つ白に雪が降っている」となります。なお、当時の田子の浦は、現在の富士市の田子の浦よりも範囲が広く、浦原・由比・興津の海岸を指すとするのが有力です。

一方の2は、「田子の浦に」とあって、田子の浦の地に立ち、振り仰いだ富士山を詠んだ歌になっていて、「白妙の」という比喩的表現（枕詞と取る説もあります）や、「降りつつ」と余情を持たせた歌の終わりかたなど、全体的に優美な雰囲気があります。「田子の浦辺に出て眺めると、まっ白な富士の高嶺には、今もなお雪が降り続けているよ」といった意味でしょうか。

実際には、山頂に雪が降り続けている光景は、雲で隠れてしまつて見えないのですが、『新古今集』時代の歌人の嗜好に叶った唯美的な歌に仕上がっていると言えましょう。

なお、近年の研究で、赤人の時代の都人にとつて富士山は、荒ぶる山であり、日本一の山というよりも東国の一山として認識されていたことが示されています（梶川信行氏「山辺赤人は「富士山」をうたつていない」『静岡の文化』第九十六号、二〇〇九年二月など）。

（文化局主任研究員 田代一葉）



薩埵峠から見た富士山